令和５年９月総評

西躰　かずよし

今月の投稿数は多かったと思う。そして選んだ中には新しい書き手もいた。ここが書き手の新たな表現に向かう場の一つになればいいと思う。

どちらでもないに丸して夏休み

音無　早矢　　埼玉県

どちらでもないという設問の選択肢はよくあるけれども、どうでもいいとか、つまらない質問と思っているときにも選ぶことがあって、学校でのもやもやとした日常を表しているかのようである。『どちらでもないに丸して』という一節は、そうした生活との決別という風にも読める。

誕生日の日記のページをちぎる

まちりこ　　埼玉県

誕生日はうれしいものとは限らない。その日が憎悪の対象となることがあるかもしれない。日記のページをちぎることが、慰めにつながらないとしても、そうせざるを得ない必然性のようなものが作品からは感じられる。

卵がけごはん
のような
やさしさで
ひかりへ落ちるぶんちょうのはね

さいう　　愛知県

『ひかりへ落ちるぶんちょうのはね』は悲劇を予感させる。
あたたかな朝食の途中にかかる電話のような。
やすらかな死へとつながっていくかのような。

読みさしの本をあなたに貸す朝の
前日のカレーを水で薄める

小島　涼我　　東京都

前日のカレーは、いつものとおりのものなのに、どうしてこんなにあたたかな気持ちになるのだろう。それは、しあわせというものが、いつものとおりのなかにしか見つからないものだからかもしれない。

コスモスをくすぐりながら下校班

杢いう子　　佐賀県

葉っぱをちぎったり、葉っぱにさわったりするのは、地方の子どもたちの下校時にはよくあることだろう。作品から浮かび上がる子どもたちの賑やかな様子。そして、大人になった僕たちは、あの頃の希望と不安の入り混じった感情へと引き戻されるのである。

クレンジングバーム
ひんやり虫の闇

吉沢　美香　　宮城県

クレンジングバームはメイク落としもできる洗顔クリーム。頬につけた瞬間を詠んだものだろうか。虫の音とクリームのつめたさだけが残る。直接感情を詠まないことで広がる静謐な空間。俳句の良さがいっぱい詰まった作品。

夜の水族館
海月はピアノの音に溶ける

長谷川柊香　　宮城県

夜の水族館はうつくしい。そこにある海月もピアノの音も。ピアノの音が描かれることで、逆に水族館の静けさが際立つ。作者は静けさの向こうにある沈黙を描こうとしているかのようである。

羽化、
ひらがなのように
ほどけた
ひかりと生きて

こはくいろ　　大阪府

羽化のあとは、あわただしく交尾をして死んでいくばかりとなる。それはいのちを次へとつなぐというようなセンチメンタルなものではなく、事実はもっと酷薄なものに違いない。語り手はそれをわかってしまっている。『ひかりと生きて』と願わずにはいられないのは、だからかもしれない。

ぬれている市役所の建物のように
限界なのよなんとなく、こう、

真島しましま　　千葉県

軽い感じ、けれども全然軽くない感じ。『市役所の建物』という比喩と『限界なのよなんとなく、こう、』という言い回しの巧みさは、エビフライについてくるタルタルソースくらい絶妙。冗談めいた語り口にあって、語り手のぎりぎりの感じが伝わってくる。

たましいを模して夏の雲

香取小春　　宮崎県

たましいって書くと、どこかひりひりする。それはとおい昔に失われてしまったもののように感じる。僕たちは、自分の人格も、やさしさも、ことばも、脳や体の働きの結果に過ぎないという現代の唯物論にどっぷりとつかっている。それでも神さまや、たましいのはなしを時折思い起こすのは、それが、ある種のなつかしさにつながるからだろう。神話や、物語

のなかにしか存在しない存在の故郷。おそらく人間がことばを話す存在である以上、物語はなくならないと思う。私は、私というたましいを模す肉体なのかもしれないかもしれないけれども。この作品に感じるなつかしさはそうした種類のものかもしれない。

ビニル袋にフェラチオの後の夜食

みのり　　神奈川県

行為のあと、ビニル袋の夜食へと移ったのは何故だろう。性欲が満たされたから食事へと移ったのだろうか。そうであるなら、ビニル袋の夜食はあまりに安っぽい。ビニル袋のなかの夜食は、フェラチオという快楽も食べるという快楽もすべて洗い流してしまうかのようである。とおくの切なさへとつながるために。

コインパーキングのでかい看板へ
落ちる夜雨になりたい
光りたい

汐見りら　　東京都

この書き手の思い込みの強さはほんものだと思う。それはときとして自身を傷つけるかもしれないけれども。たとえば次の作品『保冷剤首に巻きつけ駅までは／ショートケーキのつもりで歩く』についても同様で、ここでの人物はショートケーキになりきっている。

ひき肉になりたいのに
あたし渡る
青信号てくてくと

羊夏生　　東京都

『ひき肉』と聞くとぎょっとする。そして作品後半の明るさとの落差に違和感を覚える。でも事実はそうゆうものかもしれない。ときに日常は残酷さと、となりあう場所にならんでいるから。不幸は不意に口をあけるものだから。ただ、この作品の表現するものはその反対の場所に位置している。残酷さのなかに浮かぶ日々の明るさと罪深さ。

顔洗う姉の背中におはようと
抱きつきパジャマのやわらかい秋

かわなご　まい　埼玉県

そのままを書くのが難しいのは、僕たちが、世界に対する新鮮さを少しずつ失うからかもしれない。新鮮であることは同時に痛みをともなうことだから。けれど、誰かが生きるということは慣れることと同義だと言ったとしても、作品はその反対側で、やわらかな秋を語るのだろう。

押されて出たんです私じゃない
私と私の表面には水があります

齋藤　葵乙　　岐阜県

不思議な魅力のある作品。生まれたときの記憶だろうか。私じゃない私と私の表面にひろがる水。「私」は、私じゃない私と私との関係性のうえに、はじめて生まれるものなら、ことばもまたそうであるに違いない。

来るはずのない精子を待ち続け
律儀に流れる月の血液

髙松　瞳　　東京都

血液の描写だけを行ったことで浮かび上がる即物的なうつくしさ。物語は『来るはずのない精子』というひとことに集約される。何故そうなったのか。どんな物語があったのか。それらは読者に委ねられる。

ひとつの動作が、多くのことばより、たくさんのことを伝えることがあるように、ひとつの描写が、多くのことばより、たくさんのことを伝えることがあるだろう。

やすらかに
発火している
びじゅつかん

白藤　さくら　神奈川県

『やすらかに／発火』という一節に逆説的な印象がただよう。普段はちょっぴり権威的な美術館も『びじゅつかん』と書かれると親しみがわいてくる。ここでの美術館は施設としてのそれではなく、生きものとしての『びじゅつかん』なのだろう。
「おやすみなさい」びじゅつかん。

てきとうに祈ってた
時間のすべてで
星がいちいち死んでいた川

雲理　そら　　大阪府

作品中の『いちいち』『てきとう』といった記述から、書き手のことばに対する感度の高さがうかがえる。でもそれは、いいかえると、世界に対する感度の高さといってもいいかもしれない。てきとうに祈って、いちいち死ぬということ。こんなにも明るい死に僕たちはかこまれている。
同じ作者の作品に『死んでもきみには会えないって／感傷ふりかけたごはんが／おいしいね』というのがあるが、これも素敵な作品。

なにか忘れている気がするから
もう少しだけ夏でいて。

吉田六　　東京都

『夏でいて』というのはどうゆうことだろう。季節がその季節に留まるということ。それは時間の停止を思い起こさせる。もしくは永遠を。

歩道橋ゆらそうよって飛び跳ねる

あなたのポニーテールは自由

亀井　　千葉県

教科書には「自由とは不断の努力によって守られるもの」なんて書いてあるかもしれないけれど、そんなしかめっ面した自由ばかりでなくてもいい。跳んだり跳ねたりできるというささやかな幸せを、彼女もしくは彼のように高らかに自由と宣言したっていいのだ。

参考書から顔を出すカラフルな
付箋はきっと赤ちゃんの虹

詩央えみる　　大阪府

やさしくなりたい時がたまにある。そうしたらこうした作品を読んだらいい。世界は先生がいうほど美しくはないかもしれないけれど。やさしさはことばを介して人と人とをつなぐこともあるから。いまは充分に暗いけれど。それでも世界は僕たちが思うよりましなのかもしれない。